

氏 名 (本 籍)	甲 斐 健 人 (宮 崎 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (体育科学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,445 号		
学位授与年月日	平 成 10 年 7 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
学 位 論 文 題 目	学歴社会における高校部活の文化社会学的研究 —「身体資本と社会移動」研究序説—		
主 査	筑波大学助教授	教育学博士	松 村 和 則
副 査	筑波大学教授	教育学博士	片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学助教授	博士 (体育科学)	中 込 四 郎
副 査	筑波大学助教授		飯 田 浩 之
副 査	筑波大学講師	社会学博士	黄 順 姫

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 論文の構成

本論文は、序論、第Ⅰ部（第1章～第2章）、第Ⅱ部（第3章～第5章）、結章、補論および文献目録から成り、204ページ（1ページあたり800字で、400字原稿用紙約408枚に相当する）より構成されている。

2. 論文の内容

本論文は、学歴社会の下での学校「課外スポーツ」に注目し、P.ブルデューのアイデアである「文化資本論」（「身体資本」概念）を援用し、運動部活動で蓄積された文化資本がその後の社会生活で如何に機能し、社会移動と連動していくかを実証的に解明しようとするものである。現代の体質・スポーツを「再生産」する機関としての学校及び体育制度を再考するための基礎的な研究と位置づけられる。

序論では、筆者の立場を明確にすると同時に、「スポーツと社会階級・階層」に関する先行研究の検討をふまえて課題設定の理由を明示した。さらに、「階級」把握に関して文化的格差を重視し、学校格差と地理的格差に注目する必要性が述べられる。

第Ⅰ部『方法論的枠組みの検討』は、2章で構成され、「学歴社会における高校運動部への社会学的視角」では、生徒文化論（教育社会学領域）の先行研究の検討に基づき、文化資本論を援用する必要性と実証的課題が示された。

生徒文化の類型化による生徒理解の限界が示され、生徒文化を学校文化や外的社会との連関の中で把握する必要性とそのための文化資本論の有効性が論じられた。さらに、高校生の日常生活を射程に入れ、彼らの「戦略」を理解するためには身体資本が経済資本へ転換するプロセスを理論的・実証的に解明する必要がある。そのため、学歴社会では相対的に弱い文化資本である「課外スポーツの経歴」（＝身体資本）に着目する必要性が述べられる。加えて、高校生がこの身体資本を利用しようとする時、「転倒」の危険性があることが指摘される。

第2章『文化資本』としてのスポーツの山村の意味では、地理的格差を把握するための方法が「地域の教育力」論の検討を通して論じられた。山村にとって学歴（＝正統的文化資本）の獲得は人口流出と結びついてきたことが示され、学校、学歴社会を再考する視座としての「地域の教育力」に再度着目する必要性が述べられた。さらに、「地域の教育力」を把握するための実証的指針が提示された。山村を実体的な村ではなく、都市との緊密な関係性を繋いできたムラとして把握する必要性が述べられる。そして、身体資本の両義的な性格を明示するの

みでなく、暮らしの「場」(＝山村生活)がその「資本」の高い換算率を保証することを論証した。

第Ⅱ部『高校運動部員の「身体資本」と「戦略」』では、3つの事例による実証研究が行われている。

第3章「高校ラグビー部員の『戦略』としてのスポーツ」では、大都市近郊の「進学校」に注目した。第1節では、対象校の特徴を述べた。第2節では、部員たちが学歴主義を相対化していることが示された。第3節では、彼らの身体資本は「戦略」的に学歴資本に転換されることが明示された。第4節では、身体資本が彼らの学歴主義内容での「抵抗」を支えていると指摘された。

第4章「『文化資本』としてのスキーと『地域の教育力』」では、福島県檜枝岐村に注目し、身体資本の転換の限界が地理的格差との関係から論じられた。第1節では、同村の概況が説明された。第2節では、同村においても都市と山村との間に一方的な人・文化の流れが存在していたことが示された。第3節では、ムラによって支えられたスキーが生み出す身体資本が他の「資本」へ転換する具体的な有り様が明らかにされた。第4節では、身体資本が他の「資本」へ転換し、「都市－地方」の文化的格差を補うものとして効力を発揮するのみならず、誇りを持って山村に暮らすための「資本」ともなる可能性を提示した。

第5章「高校サッカー部員の『経歴』と社会的再生産」では、大都市近郊「底辺校」に注目し、身体資本の他の「資本」への転換の限界が学校格差との関係で論じられた。第1節では対象校の特徴が、第2節では、部員たちの「暮らしの論理」が学校生活や部活動への取り組みに結びついていることが示された。第3節では、彼らの身体資本が転換に関してほとんど効果がなく、「階級」の再生産につながることが示唆された。第4節では、「階級」内部での彼らの「抵抗」を評価するための縦断的研究の必要性を指摘した。

結章では、研究の総括と結論および今後の課題が示された。身体資本を他の文化資本、経済資本へ転換するには構造的格差を考慮する必要がある。共時的に捉えるとき、課外スポーツによって得られる身体資本は学歴社会を支える構造の再生産に結びついていたと結論せざるをえない。しかし、文化装置としてのスポーツを活用し、「階級」概念や地理的格差を超えようとする山村住民や一部の就農者に彼らのしたたかな「戦略」をみ、それを支援する暮らしの「場」の存在に論究している。加えて、さらなる実証的課題を追求するための通時的視座を錬成する必要性も主張されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

我が国の体育科学の領域において、スポーツ・体育を社会的に解明しようとする試みは、その独自の視角の獲得という意味において、まさに端緒についたばかりとにいえるだろう。体育集団の研究に端を発する体育社会学に始まり、メディアが積極的に生産する現代スポーツを解釈学的方法、記号論的方法を駆使して解明しようとする現代のスポーツ社会学に至る歴史の中で、スポーツ独自の方法的自覚を持って追求した研究はほとんどないと言っても過言ではない。しかし、本研究はスポーツという研究対象の特性を自覚して新たな「体育社会学」を構築しようと志し、果敢に隣接領域にまで踏み込んで先行研究を渉猟した野心的論考であるといえる。

研究課題の究明にあたり、体育・スポーツ社会学領域の先行研究はいうまでもなく、日本における教育社会学、P・ブルデューの文化資本論(身体論)に関するこれまでの蓄積を丹念に検討することから出発するという堅実な姿勢を貫いた。さらに、大変な労力と時間をかけて3つの異なる地域における実証的なモノグラフを提示することで図式的な論証を超える視点を持つことに成功している。

しかしながら、「身体資本」の他の「資本」への「換算率」といった抽象的把握に対して、実証研究が充分にその後ろ盾を提供していないという指摘、「課外スポーツ」による身体資本獲得率が学力偏差値に相関しているのではないかという疑念には、充分な実証的データを提供し得ていないという限界も見える。さらに、身体資本と他の文化資本との関係、文化的な「階級」概念の今一步踏み込んだ理論的考察が必要だとの評価も述べられた。

こうした限界を持ちつつも、本論文の学術的価値を再度鑑みたとき、その手堅い先行研究の検討と丹念な実証

的モノグラフは、「体育社会学」の確立へ向かう著者の行く手を明確に示していると考ええる。
よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。